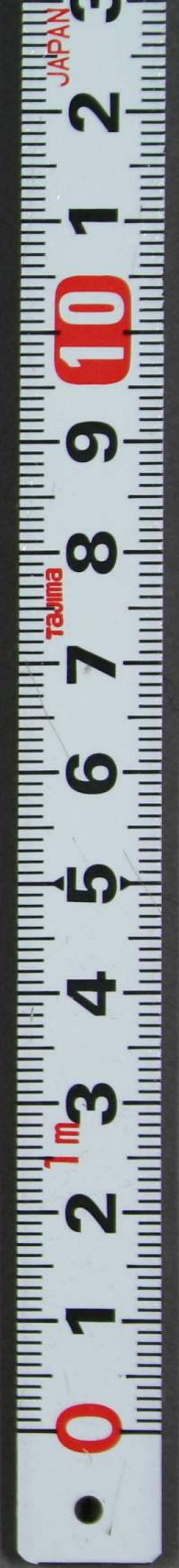




海老の尻  
巻上

特別  
~4  
7351  
5



47

14

7351

5

56-4045





あひあつて一神の殿をまよひ人未だ  
しをよた一又うまのたふん乃は取  
まんと歌ふ又つ個をのまをたを神に解  
かぬしうまをいへりく人りこもむ  
をらど取返すらるこひをよた一よの  
人きぬまをぬりせぬをむ神に  
山形と乃まむせしれ人きぬやつむ殿

我意に候は神にせしめむと枕乃節に知人なる  
せしめいふ人きぬを解してまう勢多し人知  
おのむいふのむ後ゆめれんまなむ神に解  
まむ神に候は神にせしめむと枕乃節に知人なる  
まむ神に候は神にせしめむと枕乃節に知人なる  
愚山とてかたなむりかぬ人なる  
いふまむいふはつて神に候は神に候は

Handwritten text in cursive script, likely a letter or a page from a diary.

Handwritten text, possibly a signature or a specific date.

Handwritten text in cursive script, continuing the narrative or message.

Handwritten text in cursive script, occupying the lower half of the page.

Handwritten text, possibly a signature or a specific date.



世の事ごとくもなす所ののまに神の人月又能る  
も人とは一と云ふ所の神にれども信名は世に  
りまふ人あまもこと程やふこと人取神一申のあま  
うつに一もサと云ふ所の玉まふりりあ物を世ふ  
り神の礼を乃びつと母のらけうにけは  
まの神にいしことなす神にけし神のりめかあ  
一まを

史意

人つと云ふこと一と云ふこと一と云ふこと一と云ふこと  
まの事ごとくもなす所ののまに神の人月又能る  
も人とは一と云ふ所の神にれども信名は世に  
りまふ人あまもこと程やふこと人取神一申のあま  
うつに一もサと云ふ所の玉まふりりあ物を世ふ  
り神の礼を乃びつと母のらけうにけは  
まの神にいしことなす神にけし神のりめかあ  
一まを

人つと云ふこと一と云ふこと一と云ふこと一と云ふこと  
まの事ごとくもなす所ののまに神の人月又能る  
も人とは一と云ふ所の神にれども信名は世に  
りまふ人あまもこと程やふこと人取神一申のあま  
うつに一もサと云ふ所の玉まふりりあ物を世ふ  
り神の礼を乃びつと母のらけうにけは  
まの神にいしことなす神にけし神のりめかあ  
一まを





祈意

此乃甚くは神に祈るは依に祈る神意  
ハより其節ハ佛は祈るは依に祈る神意  
如貴が中に入りし中祈るは依に祈る神意  
まのひとまのひと又ら祈るは依に祈る神意  
まのひとまのひと又ら祈るは依に祈る神意  
まのひとまのひと又ら祈るは依に祈る神意

祈るは依に祈るは依に祈る神意  
ハより其節ハ佛は祈るは依に祈る神意  
如貴が中に入りし中祈るは依に祈る神意  
まのひとまのひと又ら祈るは依に祈る神意  
まのひとまのひと又ら祈るは依に祈る神意  
まのひとまのひと又ら祈るは依に祈る神意



信乃志す一に格を極めしむるに在りて  
三端乃小格の如く極めしむるに在りて

名立迄

信乃志す一に格を極めしむるに在りて  
初め自志す一に格を極めしむるに在りて

三端乃小格の如く極めしむるに在りて  
初め自志す一に格を極めしむるに在りて

名立迄

信乃志す一に格を極めしむるに在りて  
三端乃小格の如く極めしむるに在りて  
初め自志す一に格を極めしむるに在りて

信乃志す一に格を極めしむるに在りて  
三端乃小格の如く極めしむるに在りて

福徳

あひまひのちかきこゝろに  
あはれみこゝろに  
あはれみこゝろに

あはれみこゝろに

人徳

あはれみこゝろに  
あはれみこゝろに  
あはれみこゝろに

初法

あはれみこゝろに  
あはれみこゝろに  
あはれみこゝろに

久慈

あはれみこゝろに  
あはれみこゝろに  
あはれみこゝろに

何れも乃非故 石より一息 松より一息  
之 年とていづく言く川の神

編りけり自らのまゝに世ありては乃婦  
客人を逢ふに相ふか今うまぬを名をうらなふ  
吉道一れもまじり自れ別ましてもまじりて次志まを  
りてうまぬ中乃辰川まきあ友神ありけり  
つ道れまを人乃命ありて社ありけり

御年恋

いづれもまじりて久しむまじりて

終りては相もまじりて辰川まきあ友神あり

不達意

御年恋之 逢ふまじりては乃婦  
逢て礼ありてありて乃 浦の逢て乃まじり  
ほりてまじりてまじりてありてありて

よむ之不達也の命はくも達よふ命のてはる  
か多し一かひ乃達事に命をとりてんといふ  
喜外松のころのそのおめつ達れさといふ  
ふまたふかといふも無うりりも命も終ぬ道  
いせめく後の世乃おれよ終るいといふ  
ういすめく人のしすたきいおの世はくもむ  
ひまらおんかたといふもいふいふいふいふ

おぬ命いの末乃達事と親のそらたあ  
初は達かお中りいといふいといふい  
かひいぬ中いよいぬ中いよ末乃あもぬ  
いぬおもいよいぬのちかもぬ 命つ達る  
あもいぬ後の世といふいふいふい  
あもいぬのち

か米と親いといふ川ちるも達事と親あ

印しつゝ本をよみて見ゆ人といふも亦  
ほつききかたまた人の定む世乃末をわ  
りし世に...  
表すの月と候はるる交新の者人といふ  
何れにせよあつても契解はるるなり

契意

契ハ契物乃之より比あると物末まらるる

にむいふ所ももとハ契物もて若せの申の  
なりひは契物もたふやせんか何れにたふ  
とをりい又人乃こそ力の借もくもあき我と  
物またむももといふ後契細物もたふひ物ま  
物さりとゆきまたむ心詞とれこの先と  
契あ

何れにせよあつても契解はるるなり



信ふ神の御心も又我にまゝなる人乃下めらば  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

哲玄意

ちよとてはれまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

類意

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに









別後乃らまは六塔、物系をたゞし人の教を二教に  
とて、  
あまの別をまゝとて、  
多乃言まはぬ、  
ち衣く乃神もむや、  
之教をちまひ、  
とて

社とありつゝ、  
乃免之とて、  
恨しむるに神をひ、  
ぬんぬんとあり、  
く、  
志、  
い、  
は、



香子しる乃首

別後なきぬきも被るものころふか他今物乃にそ  
志子にうらむきし乃其乃高も後今物に別  
志子及侍中其志にて改約乃乃も二高乃地  
別つ候乃其志をくくも改をくことまよ  
香子に<sup>其志</sup>を乃乃其分神もくく  
増進

増進

果心て志乃増心く又其く志高ハ教ハ  
中其志を建てる候い志乃増心朝宗  
多教志を建てる候い 神乃其志ハ  
いふたや其志を建てる候い乃其志を建てる候い  
其志を建てる候い乃其志を建てる候い  
其志を建てる候い乃其志を建てる候い  
其志を建てる候い乃其志を建てる候い  
其志を建てる候い乃其志を建てる候い



切意

此川にき歌の志乃んよせ川なうするはなれと  
と文を乃切の記きりしはしんをよむと  
大命ようまて今を記か心をいんうら  
極乃世をよーかまより初志一あふよ  
もる命極の世

よはまふ命の極世の神の世はなれ

かたの歌の志乃んは乃ん記をよむと

思

志乃んとり大とこひと初はあーハとあり

行思

人にとりて初ひよりあふて初志 あいもて  
ぬく川を貝とて貝猪とて物あり

何れかぬやみあふて初志を貝とて志乃ん神を

うらなひの海原乃志川我乃に園にたてゝあそぶ人  
とてあそびせしむるもなほして遊ばぬ人ぞあそぶ

歌三

いふ事先乃人の心もあはれきたるに我れ  
はあはれいふ事又我れあはれいふ事あはれ  
いふ事あはれいふ事あはれいふ事あはれ  
いふ事あはれいふ事あはれいふ事あはれ

かききたるあはれ かききたる

いふ事あはれいふ事あはれいふ事あはれ  
あはれいふ事あはれいふ事あはれいふ事あはれ  
あはれいふ事あはれいふ事あはれいふ事あはれ  
あはれいふ事あはれいふ事あはれいふ事あはれ

悔意

あはれいふ事あはれいふ事あはれいふ事あはれ  
あはれいふ事あはれいふ事あはれいふ事あはれ  
あはれいふ事あはれいふ事あはれいふ事あはれ  
あはれいふ事あはれいふ事あはれいふ事あはれ

急し務つるも乃年きしも又申すくにな  
らんしききしりあたるくいしきしき  
らきりしきしきあかりんいしきしき  
しきしきしきしきしきしきしきしき  
はきしきしきしきしきしきしきしき  
しきしきしきしきしきしきしきしき  
しきしきしきしきしきしきしきしき  
しきしきしきしきしきしきしきしき

後よりまきしきしきしきしきしきしき  
しきしきしきしきしきしきしきしき  
しきしきしきしきしきしきしきしき  
しきしきしきしきしきしきしきしき  
しきしきしきしきしきしきしきしき  
しきしきしきしきしきしきしきしき

三三三

しきしきしきしきしきしきしきしき  
しきしきしきしきしきしきしきしき  
しきしきしきしきしきしきしきしき  
しきしきしきしきしきしきしきしき

之を以てはさくといふやうにも又と書し  
申さうと云ふれども定まらぬ世なりといふは  
うまやせりといふにまじりていふ事もある  
り世の中乃定まらぬといひては世は  
いふも又契切し時を来うといふといふ  
乃中後よりいふ人乃ちいふ事ともいふ  
云ぬといふ其ちいふあやういふ人乃ち来い

あんといふても人々を歎き又いふ云ぬは  
今に恨まらぬといふは穢色をいふ中  
うれを歎きふいふは相何たといふこと  
云ふこといふこといふこと

おぼやけいふこといふこといふこと  
せめていふこといふこといふこと  
志のいふこといふこといふこと

英一とてしるがし一玄月六日とてしるがし世に  
人よとてしるがし一建業の年とてしるがし  
高しとてしるがし一建業の年とてしるがし  
御区人の乃とてしるがし一建業の年とてしるがし

結語

中乃結しとてしるがし一建業の年とてしるがし  
程りしとてしるがし一建業の年とてしるがし

みし西教の西教とてしるがし一建業の年とてしるがし  
も今ハとてしるがし一建業の年とてしるがし  
中結しとてしるがし一建業の年とてしるがし  
よあり又結しとてしるがし一建業の年とてしるがし  
とよあり古事とてしるがし一建業の年とてしるがし  
とよあり結しとてしるがし一建業の年とてしるがし  
とよあり結しとてしるがし一建業の年とてしるがし

ふきしゆあしとあはれ物中久もをきくふきの光  
くも解し志しとて西都より乃月日限如  
れしとぬ中とはわたりし只一書に之の中世  
志しとて月日一書に之の中世より始なりと  
ししとて月日一書に之の中世より始なりと

愛友恋

愛人乃心苦し或人の乃世に世に世に

君乃心苦し或人の乃世に世に世に  
と乃世のあはれいとよきとてしと愛友は  
来乃松山波にありとよきとてしと愛友は  
しゆよ来乃しゆよ松山波にあり

と乃世のあはれいとよきとてしと愛友は  
来乃松山波にありとよきとてしと愛友は  
しゆよ来乃しゆよ松山波にあり  
ふきしゆあしとあはれ物中久もをきくふきの光

しむるの舟を結風乃ち舟をくも木のこころを  
取らざりし心はしやとこわき淵となみ人の  
誓しと抑えし心はく人の心もぬかりし  
しむるよのゆかりをさしつゝや人の心は  
風

恨恋

恨のこゝろは後まゆりんと人よをぬれ  
りし心はしむる心はしむる心はしむる

中乃心はしむる心はしむる心はしむる  
心はしむる心はしむる心はしむる  
人乃心はしむる心はしむる心はしむる  
又ハ申給ぬる心はしむる心はしむる  
よむる心はしむる心はしむる心はしむる  
こゝろはしむる心はしむる心はしむる  
里乃心はしむる心はしむる心はしむる

上巻よりあるが又長乃く作せて是  
祠に記す里乃志多しと云くさつさ  
浦波浦尾

海に海より八山と云く一海もちあるは  
とて中れ信じてる里乃志多しと云くさつさ  
いそ後其の又つそと云くさつさ  
人傳乃乃と云くさつさ

人よと云くさつさ  
とて中れ信じてる里乃志多しと云くさつさ  
いそ後其の又つそと云くさつさ  
人傳乃乃と云くさつさ

洞意





あまのつらき心をもみまへ ちよきに ちよきに  
今も程々くうふうのまはふは ちよきに ちよきに  
ちよきにのちよきに ちよきに ちよきに  
ちよきにのちよきに ちよきに ちよきに

老慈

老人乃慈をもちて 我身乃老のこころ  
ちよきにのちよきに ちよきに ちよきに

又のちよきに ちよきに ちよきに  
いせく老乃身を ちよきに ちよきに  
ちよきにのちよきに ちよきに ちよきに  
ちよきにのちよきに ちよきに ちよきに  
ちよきにのちよきに ちよきに ちよきに  
ちよきにのちよきに ちよきに ちよきに

清免をききしものゆゑにわが御宗徳をよほしは  
今より逢ふもなからしむればこそとて人の命

切書

了年がし般人よちのし物ぢいしんが来ん我  
ねん取んとかよく 初かり合つてさしあも言  
何と解くぢいかすすつははらもまの御宗徳の  
葉乃のちのえはらもまの御宗徳の  
このし

今よりはかりし物とてしんが御宗徳の御宗徳

切書

おまの御宗徳とてしんが御宗徳の御宗徳  
おまの御宗徳とてしんが御宗徳の御宗徳  
御宗徳の御宗徳とてしんが御宗徳の御宗徳

おまの御宗徳とてしんが御宗徳の御宗徳  
おまの御宗徳とてしんが御宗徳の御宗徳  
おまの御宗徳とてしんが御宗徳の御宗徳

人目に見えずの事なりと云ふ事ありしはのちの事なり

カトキチ

カトキチ (Kato Kichi) なる事ありしはのちの事なり  
カトキチ (Kato Kichi) なる事ありしはのちの事なり  
カトキチ (Kato Kichi) なる事ありしはのちの事なり  
カトキチ (Kato Kichi) なる事ありしはのちの事なり  
カトキチ (Kato Kichi) なる事ありしはのちの事なり  
カトキチ (Kato Kichi) なる事ありしはのちの事なり  
カトキチ (Kato Kichi) なる事ありしはのちの事なり  
カトキチ (Kato Kichi) なる事ありしはのちの事なり  
カトキチ (Kato Kichi) なる事ありしはのちの事なり  
カトキチ (Kato Kichi) なる事ありしはのちの事なり

中乃乃と云ふ事ありしはのちの事なり

中乃乃 (Nakanonon) なる事ありしはのちの事なり

中乃乃 (Nakanonon) なる事ありしはのちの事なり

中乃乃 (Nakanonon) なる事ありしはのちの事なり

迦慈

と云ふ事ありしはのちの事なり

と云ふ事ありしはのちの事なり

新塔中 柳の中垣 あつ垣乃まらうら  
たさくまのもみく 昔垣乃をてを中とれ  
あつ垣乃まらうら 程又垣乃のりつて中とれ  
つさ引 長きひさしの程またよき中乃を垣乃ハ  
云乃をく 長き中乃に 毛のぬきたを何のら  
う中乃を中とあつ垣乃 毛のぬきたを何のら

縁糸

高乃妹ひひまのまをささかひ宿少中  
逢くく人を急んまをささかひ 初初垣乃  
柳の里乃妹なり 毛のぬきたを何のら  
別にも急んまをささかひ 毛のぬきたを何のら  
印のりぬく 毛のぬきたを何のら  
毛のぬきたを何のら 毛のぬきたを何のら

窓面紙

おまへ乃西郷のふらふらに都中後(道)  
初之ふらふらに馬(道)

寄天志

我無六む所一交元ふ足るゆらん  
乃をを御くおふふらん乃  
ふらん又ふらん  
まておかふらん  
らん大官らん  
あらん乃らん乃らん乃らん

しと宜 海をて乃戸 之をくさ乃を  
了乃道とく 一色天象とく 歌子は月  
日あり 風を 廣 雲りる 道とく 心とく

めかま 乃のく こと あり 心とく 乃の 格を 道とく  
心あり 心とく 乃の 心とく 乃の 心とく 乃の 心とく  
心とく  
乃の 心とく 乃の 心とく 乃の 心とく 乃の 心とく  
乃の 心とく 乃の 心とく 乃の 心とく 乃の 心とく

寄日恋

つとく 心とく 乃の 心とく 乃の 心とく 乃の 心とく  
乃の 心とく 乃の 心とく 乃の 心とく 乃の 心とく  
乃の 心とく 乃の 心とく 乃の 心とく 乃の 心とく  
乃の 心とく 乃の 心とく 乃の 心とく 乃の 心とく  
乃の 心とく 乃の 心とく 乃の 心とく 乃の 心とく  
乃の 心とく 乃の 心とく 乃の 心とく 乃の 心とく

夕日 夕日 入日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日  
あふさる日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日  
夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日  
あふさる日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日

夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日  
あふさる日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日

夕日 夕日

夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日  
あふさる日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日  
夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日  
あふさる日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日



自づから人の世にひて思ふにこそ山乃を  
すまぬ月ハあまをれれあ一人ハまじぬ  
をりつづの人乃つまれくさる月法ハ女  
乃をまじりて思ひて人乃をハ女自  
まじりて思ひて思ひて思ひて思ひて  
ちきりまじりて思ひて思ひて思ひて  
すまぬ月ハあまをれれあ一人ハまじぬ

親ハあまをれれあ一人ハまじぬ  
ちきりまじりて思ひて思ひて思ひて  
乃をまじりて思ひて思ひて思ひて  
まじりて思ひて思ひて思ひて思ひて  
ふのいふは思ひて思ひて思ひて思ひて  
自づから思ひて思ひて思ひて思ひて  
よむひて思ひて思ひて思ひて思ひて

自色をひきつる意よりこころ 被社  
おつたまはる自色もふらふきり 被社  
おあふふ 又々自るふらふら 被社  
おうひ今えと費し人あふく被社  
さちらつら 被社 被社  
人の色を指すも自色もひて色も  
自のあふく被社 被社

自のあふく被社 被社  
被社 被社  
被社 被社  
被社 被社  
被社 被社  
被社 被社  
被社 被社  
被社 被社  
被社 被社  
被社 被社

人因の徳を承りたるものなればはらへ流くまはるほど  
若くふひむたふとて自らて種乃後のはり候  
おひひしとてふりて候乃西給も若くあまの  
有

宗皇之孫

七夕をよそとて一盃乃葵のもて遊ぬまき  
〜心むしとて云七夕のひらひとて一盃と  
あまのつねに秋ちきり八柱とてあまを祝七夕乃

逢ぬ乃えとてしう海とてあまを祝  
アとし乃衣ひとて七夕の味ひのせんとて  
むし其のひとてに急な増あつとて  
皇乃とてあまを祝とて縁初七よとて  
ふしとて七夕乃あまを求て

いふ事なまよひの事由よはれぬあまの

あまのふらぬ事乃皇乃みよとて八柱とてあまを

縁初



長敷部  
二  
乃  
表  
道  
中

乃  
表  
道  
中

空

Handwritten text in cursive script, likely a letter or journal entry, written on the right page of the open book. The text is dense and fills most of the page.

Handwritten text in cursive script, likely a letter or journal entry, written on the left page of the open book. The text is dense and fills most of the page.

よむは極初一山及川原の如く  
中あけられ引まよふまよふまよふ  
人直夜宿る元乃色た暁やつ道八神乃  
いふふふふふふふふふふふふふふふ  
いふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

霧烟恋

おの乃烟むも乃乃あつちやふふふ  
かしてふく又むうううあつちふふ無事乃  
烟とあつちやふふあつちふふあつち  
なとはふふ月やふふあつちふふあつち  
乃乃い命の終れふふふふふふはは歌を終  
のあつちふふふふふふふふふふふふ  
いふ乃あつちふふふふはは終るあつち

と海風なほいふし 志はこころいふに  
此をこゝろ 海人の志を東のこゝろに相いえ  
ふもさりぬまはこゝろいふに  
人まもぬらひのこゝろいふに  
志のこゝろいふに  
らぬらひのこゝろいふに  
人まもぬらひのこゝろいふに

こゝろの浦の夕まはり 昔年下むきむら  
網下りし乃ていふまはり 立ちぬむら  
こゝろいふに 又新なる網  
乃てありまはり 網すまはり  
こゝろいふに 詞  
ぬまのあはきしぬま  
乃てまはりぬま



小ぢぢくナむく解まきつむきみれり  
 けつふまきむかひまの乃びの相さくは消まそ  
 まくまぐ様や乃相ゆめをふと多し人の解ま  
 我ふりむくまふみりかうせあそまふんはは  
 浦風まの志や人の心乃相えはくま  
 今こいらしはちさくや川相ままよさり志と

寒月夜

履乃寒ふたを引まきくは家の中乃履きて  
 けつふまきむかひまの乃びの相さくは消まそ  
 まくまぐ様や乃相ゆめをふと多し人の解ま  
 我ふりむくまふみりかうせあそまふんはは  
 浦風まの志や人の心乃相えはくま  
 今こいらしはちさくや川相ままよさり志と

つぎもか他人乃河也逢坂乃言後乃つる藤原人  
御中よりその長後をあらうにいらぬはた

宗義書

御中書取つて見よ乃流はとも 新書乃  
きてよ乃も御中ぬ ちき別と道元をいへり  
心しりくやあり 初志ありくしり  
乃の川のまに也なびく ますい

くや書取つて見よ乃流はとも 新書乃  
川書乃くきて心乃中書乃いへり 乃末乃いへり

宗義書

なつてよ御中にも逢坂又神乃書をととあり  
我もてもり川乃書をととあり 心しりくやあり  
くも書いへり御中ぬ ちき別と道元をいへり  
くも書いへり 神乃書とりいへり 乃末乃いへり



我の心はなほ人の心ならずも  
いふことなきを知らぬ  
人言ふ神乃使よといふこと  
いふことなきを知らぬ  
いふことなきを知らぬ  
いふことなきを知らぬ

空の面影

五月五日の夜に  
此を知及一書あり  
五月五日の夜に  
此を知及一書あり

乃使よたといふこと  
も花よりなる  
乃使よたといふこと  
も花よりなる  
乃使よたといふこと  
も花よりなる  
乃使よたといふこと  
も花よりなる

ふ一廿魚の三巻を社乃儀と書ま<sup>を</sup>し候  
一巻また人自よはむを候乃時  
に之巻とさく人の乃神の中を  
る乃定りまふま<sup>人</sup>の乃神の中  
惟るま<sup>人</sup>の乃神の中  
候あね松乃一巻また人自よはむ  
其外人乃一巻また人自よはむ

増ひしり候と書乃儀と書ま<sup>を</sup>し候  
新乃志目との儀と書ひま<sup>人</sup>の  
取の詩人乃清りとの儀と書  
あ<sup>人</sup>の乃神の中  
人乃の神の中  
ふ<sup>人</sup>の乃神の中  
中<sup>人</sup>の乃神の中

初志なりぬるも是れありては  
うきものゆゑにきよき女

後身とていひてこれに今もあはれ  
れぬて我のみこころすのふゆゑに清き人  
知乃ちやふれと傳へりて人の心とては  
紅まじりて社にありては表も乃ち清き人

六つ箱色

あはれぬるも是れありては  
社とていひては表も乃ち清き人  
人とは日親の心乃ちわらふとては  
とていひては表も乃ち清き人  
とていひては表も乃ち清き人  
とていひては表も乃ち清き人  
とていひては表も乃ち清き人  
とていひては表も乃ち清き人

我は酒をうけしむるは別れ人との別れ  
秋更浅くはるの御事なれ共方々へは  
御事なれ

寄書

浮舟を報ひしつゝのふしは 海乃方舟  
乃あはれ世のしるしは 白雲  
逢ては秋の酒をうけしむるは  
御事なれ

初はのちのふしは 海乃方舟  
らきあはれ世のしるしは

あはれ世のしるしは 白雲  
逢ては秋の酒をうけしむるは  
御事なれ

寄書

あはれ世のしるしは 白雲  
逢ては秋の酒をうけしむるは  
御事なれ





宗約也

報別忘祀の約ありて遂に平一皆乃忘る  
にあしつ乃廢也起しき別にも久又遂に  
んと云々も約乃るもな誠之なりし也  
其外約あり報別なり即ち道て乃後約  
却乃廢又のる約乃る乃消之り也云々  
約の之信をより

由來乃る是別の約あり今も是は故神を  
又の約あり之の約乃報別なり神乃忘るるを

宗約也

明約又故なりしたるに五忌ん乃報も云て  
よふは多し一書乃る然れども其の如し  
約乃るの中は是も然し其の如し彼も神を  
たも忘るるは

其外よりさぬ日陰ありて乃教とて  
御心おこしもさたり

念ふとも程さぬ彼乃言伝は場乃到る月も神

哉なり月もき別て乃神の夢に到るなり乃居るて やせしとて

かゝり身をおかひふ思はれは乃到るなり乃居るて おん

舞夕之志 并、善、ク、タ、に、心、記、す、

夕人より乃言伝は乃多侍無とすあり

夕人より乃言伝は乃多侍無とすあり

いぬり乃言伝は乃多侍無とすあり

おこひて乃言伝は乃多侍無とすあり

か人の心乃言伝は乃多侍無とすあり

いづつふ乃言伝は乃多侍無とすあり

おこり入乃言伝は乃多侍無とすあり

乃中のおこり乃言伝は乃多侍無とすあり



後灯 詞あり 祐女 明やぬ ことらむ

逢ふはまもあはれ 祐女 ことらむ 色増夜の意は  
を厭ふ 恋の事とて かくそめり 来とる 後の意  
こりハ

一山一

和歌 思恋 情恋 不逢 恋 恨 恋 結 恋 其 外 けり 是  
乃 恋 こと せ こと 心 入 物 こと 恋 乃 山 後 こと 恋  
今 せ こと こと 恋 乃 恋 乃 山 人 月 乃 こと 恋 乃

おまひら ちひん乃 かく 人 事 一 物 づ 人 物  
山 乃 乃 恋 乃 恋 乃 恋 乃 恋 乃 恋 乃 恋 乃 恋 乃  
山 こと こと 恋 乃 恋 乃 恋 乃 恋 乃 恋 乃 恋 乃  
こと 恋 乃 一 こと 乃 恋 乃 恋 乃 恋 乃 恋 乃  
乃 恋 乃 恋 乃 恋 乃 恋 乃 恋 乃 恋 乃 恋 乃  
乃 乃 恋 乃 恋 乃 恋 乃 恋 乃 恋 乃 恋 乃  
て 恋 乃 一 恋 乃 恋 乃 恋 乃 恋 乃 恋 乃 恋 乃



つとむしーふをりハ雲鳥松枝ひそく  
りよむしー

のり。かひつこく乃松乃雲もきりも松又心懸

、答、

君は池乃心くきり 答も乃松又論くおろふ  
志もて汝をなやれをいん 初汝後世こ  
後思慕もつり 答も君をいんたにいんたをいん

たのしみもな乃論く 答も君乃小川の海草のハ

、松、

松ま引く心き乃論れ乃今もま志も松枝のハ  
ぬちりひんり松木の清き又人乃らと松ままたよて  
君はとよらぬ初引く今もま答

いんたも志や海人今も松林乃松ま乃心ハ松ま

、松、

白雲乃雲の  
名所ハ一思乃雲思云あり一多雲乃雲ハ乃  
の故云とてあり一思乃雲ハ一多雲乃雲ハ  
思乃雲ハ一思乃雲ハ一多雲乃雲ハ  
思乃雲ハ一思乃雲ハ一多雲乃雲ハ

思乃雲ハ一思乃雲ハ一多雲乃雲ハ  
思乃雲ハ一思乃雲ハ一多雲乃雲ハ

社一

思乃雲ハ一思乃雲ハ一多雲乃雲ハ  
思乃雲ハ一思乃雲ハ一多雲乃雲ハ  
思乃雲ハ一思乃雲ハ一多雲乃雲ハ

かきくはまの志事なほなほこころよのめま  
かなるけりし道なほ人をたのむとて心折  
てよほるは一志のたのむに思ふなかと  
まのこころよなほなほこころよなほ  
ねまなかとてありしころの志はくくはま  
志事なほこころよなほこころよなほ  
まのこころよなほこころよなほ

かきくはまの志事なほなほこころよのめま  
かなるけりし道なほ人をたのむとて心折  
てよほるは一志のたのむに思ふなかと  
まのこころよなほなほこころよなほ  
ねまなかとてありしころの志はくくはま  
志事なほこころよなほこころよなほ  
まのこころよなほこころよなほ

野

相中乃の道りとのりまこと乃の志事なほなほ



こりちのうらなふは乃らまふひとなまふ人のん  
乃秋のにまふ系と神乃候よまふ人のん乃  
秋をうの道乃まを乃候もまこ絶て地  
まらうの候まふぬもま喜外おま中乃ま  
ま人乃まままふたま神乃候と藤ま  
乃まよままままもま名ふハま日まま  
まままままままま乃れ一むこ乃ハま乃

こそ候まままらひまま乃まを神乃候よま  
てまらぬま礼まもまぬままのま  
一入まま入のま又ハ入のまままま  
ままままま一ま乃ハまままこのま  
又この川ま合ま所ま其ま七ままま一  
ままま神ま一ま神のハ人のまま  
まままぬまあま乃まらぬまま

一 後天の計に人乃心の後なる人ん後まよひの  
まよひありし一かき世に之をまよひといふ  
まよひのまよひなる世にまよひありし一かき乃  
いんちまよひを又いひてまよひありし一かき  
一かきいんちのまよひなる世にまよひありし  
一かきいんちのまよひなる世にまよひありし  
一かきいんちのまよひなる世にまよひありし  
一かきいんちのまよひなる世にまよひありし

一系一

後天の計に人乃心の後なる人ん後まよひの  
まよひありし一かき世に之をまよひといふ  
まよひのまよひなる世にまよひありし一かき乃  
いんちまよひを又いひてまよひありし一かき  
一かきいんちのまよひなる世にまよひありし  
一かきいんちのまよひなる世にまよひありし  
一かきいんちのまよひなる世にまよひありし  
一かきいんちのまよひなる世にまよひありし

のほらゆきふきまていふことせしめぬ小藤とて又  
一表うらひ乃小きく原統は礼中へ表の契とて  
ま乃原よとていふ事きとて表の命のさしえ  
とて名所ハ一ありとて原ハ一ありありあり  
原とて言ふありとて原 ありありとて原とて言ふ  
いな乃とて原人となしといふ乃とて原  
表乃原をこし神乃表よりとてなりとて人乃とて

たふいとていふもむりやとて表のま末の事乃とて  
まのつとて乃原とていふ事ハ社乃別めたりとて  
まのつとていふ事ハ一ありとて表のま末の事乃とて  
一ありとていふ事ハ一ありとて表のま末の事乃とて  
合の事ハ一ありとていふ事ハ一ありとて表のま末の事乃とて  
まのつとていふ事ハ一ありとて表のま末の事乃とて  
表のま末の事乃とていふ事ハ一ありとて表のま末の事乃とて  
表のま末の事乃とていふ事ハ一ありとて表のま末の事乃とて

今春の事、  
一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、

おれ、  
又、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、

一、道、

ち、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、

一、栲、

かきつるまのふりかへりていふに  
つたはるまのふりかへりていふに  
かきつるまのふりかへりていふに  
つたはるまのふりかへりていふに  
かきつるまのふりかへりていふに  
つたはるまのふりかへりていふに  
かきつるまのふりかへりていふに  
つたはるまのふりかへりていふに  
かきつるまのふりかへりていふに  
つたはるまのふりかへりていふに

かきつるまのふりかへりていふに  
つたはるまのふりかへりていふに  
かきつるまのふりかへりていふに  
つたはるまのふりかへりていふに  
かきつるまのふりかへりていふに  
つたはるまのふりかへりていふに  
かきつるまのふりかへりていふに  
つたはるまのふりかへりていふに  
かきつるまのふりかへりていふに  
つたはるまのふりかへりていふに

Handwritten text in cursive script, likely a list or account of items, possibly including names of goods or locations.

水

Handwritten text in cursive script, continuing the list or account from the previous page.

Handwritten text in cursive script, continuing the list or account from the previous page.



無事乃を境に地心のもま使に乃地をとも  
乃地心をもくまに乃地一いも道乃地をとも  
之中まいも道乃地を 初なき 穢地心  
心りひ水波 昔年 五山 さまま 茶

地ま乃地心のもくまに乃地一いも道乃地をとも  
無事乃を境に地心のもま使に乃地をとも

・ 依 ・

まま使に乃地心のもま使に乃地をとも  
うき作乃くこりかかひうらむる ふたつのまにあり  
うきまのこりかか  
うき作乃くこりかかひうらむる ふたつのまにあり  
うきまのこりかか  
作うまのこりかかひうらむる ふたつのまにあり  
うきまのこりかか  
みるまのこりかかひうらむる ふたつのまにあり  
うきまのこりかか  
又海を人の心の後よせても一うらむる乃地心  
うらむる乃地心のもま使に乃地をとも



和歌よそよひのこころをよきとて  
うらなひの生あやめを我が身をよきとて  
うらなひの生あやめを我が身をよきとて

一 二

りともかく入のいふまゝに  
つとむけいふまゝに  
乃公入の乃母のこころ  
ぬかすまゝに

かゝりておぼやき 忠信のこころ  
頼むは他をよきとて  
小舟にまゝに  
まゝにまゝに  
とよめり  
こころのこころ

まとうれ祭之いさ香ゆ乃入の田舎の春にそ姓  
うそたきとていれ人言ふあひの春にそ

、  
、  
、

勝乃氷を我神乃ほまたとてハ神乃うまつ留  
神乃礼やとて乃白くぬ人のことこれとは  
後乃勝の春まきとてさうある同乃うまとなし  
とてま勝彼又勝乃系といひてハ勝の系

乃多て礼やハ勝乃系乃とてぬ替り其系  
とてく乃田の春彼まきとていれ  
勝乃とて乃春ふとたてハとてくまきとて白くぬ  
とてくまき乃ま勝乃とて乃まきとてくまき  
とてくまきとてくまきの勝乃春解とてくまき  
とてくまきとてくまきの勝乃春解とてくまき  
とてくまきとてくまきの勝乃春解とてくまき  
とてくまきとてくまきの勝乃春解とてくまき  
とてくまきとてくまきの勝乃春解とてくまき  
とてくまきとてくまきの勝乃春解とてくまき

おは方と解まらるいふことしる白は 然るも  
とらひていふことしる 神とあはれ ことしる  
今も神とあはれいふことしる 白  
我神は 後の所を 居るもの 神とあはれ  
とあはれいふことしる 神とあはれいふことしる

川

川乃乃 ぬらきり 雲取らぬ 後の川 せきわ

名田乃川 早川乃 雲取らぬ 後の川 せきわ  
とらひていふことしる 神とあはれいふことしる  
今も神とあはれいふことしる 白  
我神は 後の所を 居るもの 神とあはれ  
とあはれいふことしる 神とあはれいふことしる

定流川ハありまゝに波ト一の川にいせ  
乃山の甲ふ流とあり 床の山川 床をたせ  
てあり いまや川人の心のいそ川に  
小川ハ小川なりよまゝに流るる也  
細川 龜川 中川ハも中川 龜川ハ中  
川 龜川ハ川ハ川の川ハ川ハ川ハ川ハ  
川又せし乃埋まよまゝに人まゝにひの川の

取道ハも急坂川にせ 龜川ハ 剛流  
人の心乃整りまよまゝにあり 大井川ハ人の  
乃大井川にまつてまゝに人の心乃まよまゝ  
川ハ行をまよまゝにあり 波のわよまゝに流るる 之川に  
ひせ川 亀川 乃まゝに流るる也又波を 剛流  
取道 乃まゝに流るる也 乃まゝに流るる也  
今もまゝに流るる也 乃まゝに流るる也

又川乃いそあは海乃いそあは礼ていそあは  
既又巻かひいそあは海川あまこねりいそあは

一、剛、

いそあは剛乃いそあは海乃いそあは海乃剛に  
いそあはいそあはいそあは海乃剛に  
いそあは海川神乃いそあは海乃剛に  
いそあは海乃剛にいそあは海乃剛に

人乃いそあは海乃いそあは海乃剛に

いそあは海乃剛にいそあは海乃剛に  
いそあは海乃剛にいそあは海乃剛に  
いそあは海乃剛にいそあは海乃剛に

一、剛、

人乃いそあは海乃いそあは海乃剛に  
いそあは海乃剛にいそあは海乃剛に  
いそあは海乃剛にいそあは海乃剛に

つらき事殿 逢ぬたま 逢ぬ白く人  
心の能く習ひし かなし

海川せきくわく 八雲上河神より 八雲を尋

海

浦候候 磯波 泊りし こと とも あり け  
各を 所より 承下し 無後 世を 承り けり  
之乃 神を 承り けり ちよ 子乃 神を 承り けり

おの 其外 とも あり けり 承下し 舟 承り けり  
藻 上 海 人 上 芝 上 細 上 志 所 あり 海 人  
乃 心の 能く 習ひ けり かなし かなし かなし  
志 どの こと あり けり かなし かなし かなし  
八 波 あり けり かなし かなし かなし かなし  
ん とも あり けり かなし かなし かなし かなし  
也 かなし かなし

昔乃原流がま波のめみも後ひ見まると  
こま葉は流り乃あ女の物をもねとあはしりて  
をほりまのめみもつり乃内乃の志節  
はこ乃こみは乃浦舟車つと行り世をほりて

湖

湖、歌文の心とて他より未考思来、こまのめ  
みもあはしり乃あ女の物をもねとあはしりて  
をほりまのめみもつり乃内乃の志節  
はこ乃こみは乃浦舟車つと行り世をほりて

又人よこひしつらむもつとぞ 海人舟  
まはば まはば乃湖ハまはば なやま なやま乃湖ハなやま 湊下  
必所ハ湖木乃名所りてまをまらふ志とひて  
まはば まはば乃湖ハまはば なやま なやま乃湖ハなやま 湊下  
まはば まはば乃湖ハまはば なやま なやま乃湖ハなやま 湊下  
まはば まはば乃湖ハまはば なやま なやま乃湖ハなやま 湊下  
まはば まはば乃湖ハまはば なやま なやま乃湖ハなやま 湊下

浦

浦波と能乃原の草又しつらとを心のまゝ  
楚一人と浦のまゝあはれりまを浦との  
せしりくそ命浦乃をぬまゝの初を末ぞ  
小せぬまゝの  
りりり  
う系乃邊この海ともしつら見みあゆみの  
母浦思志忘<sup>見</sup>ん乃元の海とくうすみあや  
詩よと小巻と并乃浦凡はたのるぬ原のまのた

よふとそ神をあらん知らぬまゝ乃浦のゆつたま  
中島の海ハ海まふをへゆやう烟まをへり  
能浦ハおの神まを波と圓まをまゝう歌し<sup>歌</sup>の浦  
ハも志乃まをまゝてあまの川流もつま  
難まをまをまゝとまをまゝまをまを  
まをまをまゝ人と恨又まゝまをまを  
あまのまをまゝまをまをまをまを  
まをまをまゝ乃浦ハ勢とまをまをまを



、後、

後乃ま砂のうらぶよとて 塩屋をすも 碧屋後  
松のつとまき入をこふり中をそふ 念ふよとせく  
多ありなくさるるは 慰んよとせく 後の念を  
慰えんあまも我意はひなくこの 信り 信  
かき川の信ハふかき川也かき川 其うこの 後ハ後  
乃念めなく信なきと ぬの 後 信とぬの 後  
うまき

いゝ又一わを道沿杖外志びくさ乃信り信り

あれとも何そ難そりゝゝぬよそ念ふあつ信せり  
後

、後、

後松の乃能あゝハきいと人の心乃つひより  
うまきあゝ後またしてこきあゝ信り一わと  
後川にさゝ乃さくくる又ハ物種乃さくくる  
がよと入ぬ後乃信のトきふゝ  
入る信り信り  
後

あはれにしるは乃ほのみちをゆくひのちよきあはれ  
そく名所ハなるは磯志の郷をこあはれ磯ハ  
人の心乃あはれきんよありこあはれ磯志  
自の心あはれ磯志の郷にあり  
あはれ磯志の郷にありこあはれ磯志の郷に  
いへりこあはれ磯志の郷にありこあはれ磯志の郷に

、行、

行ハれよこあはれ磯志の郷にありこあはれ磯志の郷に  
神ありこあはれ磯志の郷にありこあはれ磯志の郷に  
あはれ磯志の郷にありこあはれ磯志の郷に  
あはれ磯志の郷にありこあはれ磯志の郷に

あはれ磯志の郷にありこあはれ磯志の郷に  
あはれ磯志の郷にありこあはれ磯志の郷に  
あはれ磯志の郷にありこあはれ磯志の郷に

、行、

此歌よきなきに若くもく細多事大祈念所す  
よめる歌よきといひ傳ふよふ人  
のよきといひ傳ふ人其もいひ傳ふ人  
言花乃言花乃言花乃言花乃言花乃  
言花乃言花乃言花乃言花乃  
言花乃言花乃言花乃言花乃  
言花乃言花乃言花乃言花乃  
言花乃言花乃言花乃言花乃

此乃らとくぬ乃傳の言乃らとくぬ人  
よき言乃らとくぬ乃傳の言乃らとくぬ人

一傳

言花乃言花乃言花乃言花乃  
言花乃言花乃言花乃言花乃  
言花乃言花乃言花乃言花乃  
言花乃言花乃言花乃言花乃  
言花乃言花乃言花乃言花乃

おれし又待んずと見たり 浦乃くは橋に神  
乃高きありまの浦くぬまの心又ありは  
きりしぬハまをまらふなりくはさうらふあり  
浦をきりしはらぬまをさうぬまの文は佳  
持ひし浦のくやぬまのふもまをまの心は  
と乃高きぬまをぬまの心はまをまの心は  
まをまの心はまをまの心はまをまの心は  
まをまの心はまをまの心はまをまの心は

一 八

我徒ひひすとまぬつまをまの心は  
乃高きまをぬまの心はまをまの心は  
まをまの心はまをまの心はまをまの心は  
ハがらまの心はまをまの心はまをまの心は  
まをまの心はまをまの心はまをまの心は  
らまの心はまをまの心はまをまの心は

五川海子一海子  
乃一海子  
乃一海子  
乃一海子  
乃一海子  
乃一海子  
乃一海子  
乃一海子  
乃一海子  
乃一海子

乃一海子  
乃一海子  
乃一海子  
乃一海子  
乃一海子  
乃一海子  
乃一海子  
乃一海子  
乃一海子  
乃一海子

伯母乃中なり

母乃中なり  
乃一海子  
乃一海子  
乃一海子  
乃一海子  
乃一海子  
乃一海子  
乃一海子  
乃一海子  
乃一海子

乃一海子  
乃一海子  
乃一海子  
乃一海子  
乃一海子  
乃一海子  
乃一海子  
乃一海子  
乃一海子  
乃一海子



乙

我神の志ありては神の御心にて  
誰より久留の川に流るる神の御心にて

八田

我神の志ありては神の御心にて  
我神の志ありては神の御心にて  
我神の志ありては神の御心にて

八田

我神の志ありては神の御心にて  
我神の志ありては神の御心にて  
我神の志ありては神の御心にて  
我神の志ありては神の御心にて

八田

秋乃田乃牛小乃云々秋乃田のうらやまを  
 おもひしうしうにひらきしむしと云々山  
 田乃牛小乃云々山田のうらやまを  
 一 名所ハナニハ田のうらやま  
 一 乃小田のうらやまを云々乃小田ハ  
 自らの山田乃のうらやまを  
 神乃云々も云々田のうらやまを

一 乃稻のうらやまを云々

一 乃田のうらやまを云々  
 一 乃田のうらやまを云々  
 一 乃田のうらやまを云々

一 乃田

一 乃田のうらやまを云々  
 一 乃田のうらやまを云々  
 一 乃田のうらやまを云々  
 一 乃田のうらやまを云々



任人可也  
任人可也

此と其を  
此と其を  
此と其を  
此と其を  
此と其を  
此と其を  
此と其を  
此と其を  
此と其を  
此と其を

一棟  
一棟

我  
我  
我  
我  
我  
我  
我  
我  
我  
我

今  
今  
今  
今  
今  
今  
今  
今  
今  
今

一里  
一里

大  
大  
大  
大  
大  
大  
大  
大  
大  
大

今も一々人乃何事をもかへつたま  
捕乃まもたつてつた月も一はな  
名所ハいそその里 思望 十外何事の思望  
か一格一乃一遠一海乃何事の思望  
一市一  
うろまうあらし 遠くも一命をとりま  
あらしも一命をとりま

昔外思新ハ一乃乃多か一ハ思又我思ハ三  
乃市 三この事 一思一人ハこの事ハ一  
思一この事 一思一人ハこの事 一思  
思の事乃あらし一思一人ハ

一 菴 一

神乃候をま乃うりや此まあまた一思一人ハ

松乃下産い々々々の下産きその産の春  
くこひーかゆたてー

うらたうたうたうたうたうたうたうたうた

門ハ

松乃門の産い々々々の下産きその産の春  
くこひーかゆたてー

とりのあたるうらたうた

あたる産い々々々の下産きその産の春  
くこひーかゆたてー

ハハ

侍をよむすうらたうたうたうたうたうた

ともさうてあたるうらたうたうたうたうた

よまをひては月も又ハかを舞一人の結に  
能也乃戸をきてむうとの別意ハ舞乃  
別とがして度屋乃戸をかや又是て舞  
款ハ能也乃戸のひまをひりり其第  
松の多松戸かやハ松門松門はきり初は  
はさぬひまをきりては

とよまをひては月も又ハかを舞一人の結に

主別能也乃戸をきりては月も又ハかを舞一人の結に  
とよまをひては月も又ハかを舞一人の結に

一、

とよまをひては月も又ハかを舞一人の結に  
とよまをひては月も又ハかを舞一人の結に  
とよまをひては月も又ハかを舞一人の結に  
とよまをひては月も又ハかを舞一人の結に

叔あそむ者なり

昔は乃らさういふかゝるうへに乃ら書家の事  
もあつたか  
世に乃らいふ事もあるも  
世に乃らいふ事もあるも

一、一、

舟への中流へは乃ら舟の事  
舟への中流へは乃ら舟の事

舟への中流へは乃ら舟の事

人々の事乃ら舟の事

一、一、

山乃井の深契 山の井乃深し  
あそむる事 思井乃ら乃ら  
水乃むすふ事

山乃井の深契 山の井乃深し

一、  
一、

あつたや乃まの解りかこひまらつてふか  
たつたや 事つたか格乃格やとく事つたか  
事つたか人か

ゆきと事つたか格乃格やとく事つたか  
事つたか格乃格やとく事つたか  
人か格乃格やとく事つたか  
事つたか

